

精緻を極める琵琶（捍撥）の彩絵

—イランで発育、中国経由で日本に伝来—

学術博士・元(社)日本タンナーズ協会専務理事 出口 公 長

皮革を一部に用いた楽器数種について調査した。なかでも、琵琶と阮咸の捍撥と呼ばれる撥受け部分と、底に貼られた落帯といわれる部分について詳しく調査した。捍撥と落帯はいずれも薄く加工され、主に鉱物性の顔料で彩絵が施され、全面に油が塗布されている点が共通する。今回はとくに捍撥に描かれた細密画に興味を湧いたことから、その背景や内容についても触れたい。

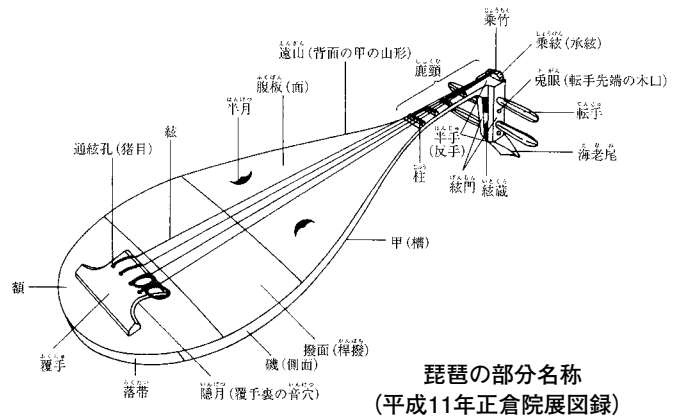
多様な楽器群が伝わる

米田雄介『正倉院宝物の故郷』の記述には「国家珍寶帳によると…いろいろな種類の楽器が記されている。それらを楽器の種類ごとに整理すると、十三種二十点が東大寺大仏に献納されたことがわかる。…(現在、その内)十四点が伝わっている。ところが正倉院には北倉の楽器のほか南倉にも大量の楽器が伝わっており、合わせると十八種類七十五点の楽器が伝わっているのである。」絃楽器は10種、管楽器は5種、打楽器が3種である。弦楽器には四絃琵琶・五絃琵琶・阮咸・箏篋・箏・箏・和琴・新羅琴・琴・瑟・七絃琴があり、この内、今回調査の対称になったのは四絃琵琶、五絃琵琶、阮咸及び箏篋である。

四絃琵琶は四面

毎日新聞社刊『正倉院寶物』全10巻（以後では「資料」と表示する）は次のように

述べている。「ここ（出口注：南倉）に四面の琵琶がある。いずれも四絃四柱の琵琶で、この形式はペルシャ起源の楽器といわれ、長梨形の胴、曲がった頸が特徴である。古く中国に伝来し、隋唐時代に盛行し、奈良時代に日本に伝来したという。正倉院には四絃琵琶は、北倉にいま一面あり、南倉のこの四面とで計五面を伝える。」そして、次項で紹介する琵琶第1号は「五面（出口：北倉の一面含む）中最も美しくもっとも完全なもの」(『正倉院楽器の研究』)といわれ、正倉院展にはしばしば出展される注目の逸品である。



楓蘇芳染螺鈿槽琵琶〈かえですおうぞめらでんのそうのびわ〉第1号

米田は第1号の捍撥の絵について「捍撥に描かれている騎象鼓楽画には、中国人らしき二人の子供と胡服を着している人物が描かれている。胡帽黒服を着用している一人の人は細腰鼓を打ち鳴らしているようで

ある。その後ろに立っている胡服赤帽を着した人物は象の上で踊っている。胡服の人物の前方の二人は横笛と尺八らしき豎笛を吹奏している。」と記している。



楓蘇芳染螺鈿槽琵琶の捍撥の図の下半分の図柄。小さい部分にこれだけの細密な絵が描き込まれている。(平成16年 正倉院展図録)

彩色技法の精緻さ

さらに、「資料」は彩色の技法等について、「捍撥は、革に白色下地を施した上に、白、朱、丹、緑青、群青、墨、金箔などで、白象の背上で腰鼓をうつ胡人、横笛、尺八を吹く童子、舞う童子を近景に、遠景の山崖に紅葉が点々とし、重畳たる山岳上に遠い空から飛来する鳥の群れ、余光を放って没する太陽など精細な筆致で唐風山水を描き、上に全面、油をひいて仕上る。」と述べている。この小さな画面にこれだけの人や動物、風景を描き込んでいることからして、その繊細さと巧妙さが窺われるというものである。また、遠山の端に「東大寺」の刻銘が記されていることは特に知られているところである。

『平成十六年正倉院展』図録には「白色顔料の一部からは、純正鉛白ではなく塩化物系鉛化合物が検出され、本図（及び本品）をわが国における製作とみる有力な根拠とされる。」と解説されている。

調査の結果

捍撥：顕微鏡観察の結果、皮質と判断した。低倍率の観察では塗料の剥落部及び端の断

面からは、紙の繊維のようにも見えるし、皮質のようにも見える。その線維構造は薄く、緻密に見える。生皮にしては油染みもない。経験的には生皮なら、地油のため塗りが困難である。彩色は極めて精密である。見た目の厚さは0.1~0.2mm。皮ならどのようにして薄くしたか、どんな動物皮か、課題が多い。これくらい薄いと、物理的強度が問題である。とてもこんな加工は出来ないと考えられるほどの技巧である。しかし、結論的には皮で、^{こうか}膠化した様な皮質が認められる。動物種を特定するのは困難であるが、猿、猫、犬等の小動物皮と推定される。落帯：塗料の剥落部があり、はっきりとした皮質の部分と、紙質状のような層も認められる。線維の解れ具合からは^{なめ}鞣し革のようにも見られ、皮質が明瞭に確認される。水平方向の繊維が多いように見受けられるのは、皮質がかなり強く伸ばされているためと見られる。動物種の特定は困難である。なお、この図柄についての解説は余り見られないが、最もよく原図の姿を残していると思われた。

紫檀木画槽琵琶〈したんもくがのそうのびわ〉第2号

「資料」によると「紫檀木画槽琵琶、丹地画騎獵捍撥第2号は、腹板は環孔材を用い半月形を透かし、槽、鹿頸、転手は紫檀、覆手は楓、海老尾、絃門は黄楊木などを用う。槽は、木画で、白蓮華、宝相華文を主文に花綬を喰わえる鴛鴦、飛鳥、胡蝶、山岳などを全面にあらわす。鹿頸、海老尾、転手、磯にも花文を木画であらわす。その材料は白い象牙、緑染鹿角、紫檀、黄楊木、黒檀、檳榔樹、錫などが認められる。

捍撥は革を全面丹地とし、下方を近景、上方を遠山と描きわける。近景は騎馬三人が水辺に虎を追い込んだところ。中景には

獲物を山麓に運び樹下で料理飲宴、上方遠景には山中騎馬人物の虎狩、さらに遠方には水平線上に連山が描かれる。彩色は丹、緑青、群青、朱、臙脂などで、描写の上に全面に油をかける。」

調査の結果

琵琶の木目は縦に走っている。漆の亀裂は横に走っている。つまり、木目と漆の亀裂は直角になっているが、これは経験的には常態であると考えられる（小澤）。

捍撥：材質は皮質である。低倍率の観察では左端下方に断面が窺え、皮が二層のように見える。その薄さと線維構造の粗さから見て皮でないかもしれない、紙の可能性もあると感じられた。しかし、調査員手持ちの張り伸ばした薄層皮革片と比較観察したところ、線維方向の不規則性から皮であると判断した。また、実体顕微鏡による再調査の結果、捍撥の2ヵ所において皮の組織が確認できたが、動物種の特定はできない。

落帯：左方で塗料膜の剥落があり、皮の線維がかなり明瞭に見られる。相当使われていたものらしく、磨耗が激しい。顕微鏡写真では、相当毛羽立って見える。動物種の特定は困難である。

紫檀木画槽琵琶〈したんもくがのそうのびわ〉第3号

当器について林謙三『正倉院楽器の研究』には「長さ97.8、腹板の幅40.8センチ。腹板は沢栗の5枚接ぎ、覆手は唐木の素木、槽・鹿頸・転手は紫檀、絃門・海老尾は黄楊木製である。乗絃・乗竹・柱・転手の一部に新補あり。捍撥は丹塗りの上に山水人物を描く。槽には木画の小紋を散らしている。」と記載されている。

また、「資料」によると「紫檀木画槽、丹地画山水古人捍撥第3号は、腹板は環孔

材、半月形を透かす。槽、鹿頸、転手は紫檀。覆手はイチイ。海老尾、絃門は黄楊木。槽は、織紋風の三種の小花文を木画であらわす。象牙、緑染鹿角、紫檀、黒柿、黄楊木などであらわす。捍撥は革で、全面を丹地とし、緑青、群青、白、赤、黒などで、下方近景に、岩上胡座し、山水を眺め、詩文をつくる二人の文人の姿、その上方の中景に岩、水流、さらに上方遠景に山岳、雲、霞などを描き、全面に油をかける。」とある。

調査の結果

捍撥：亀裂は数箇所にあって、一見塗膜だけのように見えるが、極めて薄い皮の線維が認められた。皮に亀裂はないようである。明治の頃（明治5年の記録）には当器はバラバラに壊れていたという。布目は見られなかった。皮の特定は困難である。

落帯：塗料の剥落が激しく、比較的細かい線維の皮質の露出が多く見られる。皮種の特定は困難である。

紫檀槽琵琶〈したんのそうのびわ〉第4号

明治の頃には当器はバラバラに壊れていたものという。「資料」によると「紫檀槽、丹地画摺鳥捍撥第4号は、腹板は環孔材、半月形を透かす。槽、鹿頸は紫檀。海老尾と絃門とは黄楊木。転手は黒檀である。本琵琶は、これまでのとは異なり木画あるいは螺鈿等の装飾が一切ない所に、他の四絃琵琶とは異なる。」

彩色や技法についてその後の調査結果を生かして『平成十四年正倉院展』図録には詳細に紹介されている。「捍撥と落帯には革を張り、朱下地として諸色で彩絵しその上全面に油を引くという密陀絵みつだえの一種が見られる。

遠中近景・水鳥・猛禽の細密画

そのうち捍撥絵の図様は、三段に近景から遠景まで描き分けた山水画を背景とし

て、水面から飛び立つ雌雄つがいの水鳥(マガモと見られる)に、空中から今にも襲いかかろうとする猛禽(シロハヤブサと見られる)を描いている。図様の一部に下図を写した際のくぼみが観察される。猛禽は白で彩色し、輪郭や羽毛を細かい柔軟な黒線で描き起こす。毛描きの上からはさらに淡褐色を塗り重ねる。二羽の水鳥も細部まで精緻に描かれ、雄の頸から頭にかけての光沢のある青緑色、風切り羽にある緑黒色の斑点、細かい毛描きなど、実際のマガモにきわめて忠実である。一方、背景に見られる水面や古様な岩塊、霞たなびく遠景などはいずれも緑色や淡褐色で彩色する。特に遠景や中景の山容の彩色には、下地に金箔を置きその上から濃淡の緑青で彩色象形するなど装飾的である。こうした表現は、唐代の金碧山水の手法を継承されるものであろうとされる。古様・装飾的な背景に対して写實的に猛禽・水鳥を巧みに配したところが見所である。落帯は捍撥と同様に朱下地とし、朱と緑青で花文を連ねている。」

調査の結果

捍撥：材質は皮質である。「表面は黒く変化しているが、この黒色は漆ではなく、緑青だろう。塗料材として荏油等が塗っており、それが変色したものである」(小澤)。塗膜の黒くなって劣化した部分に亀裂が入っているが、基部をなす皮の部分は切れていないようである。左方上辺に捍撥がやや浮き上がっている。露出部分では磨耗が激しく、断面も見える。上方から見て、線維が平行的に走向している様子から紙のようにも見えるが、顕微鏡観察によって皮質と判定された。皮種は特定できない。

右方上辺及び右端下方でも同様の線維の走向が見られる。この部分では、肉眼でも皮質の長い線維が見え、格子状を示す。厚さは0.5~0.8mm位であり、表面から順に、「黒

色の層+赤茶色層+皮+基板」の積層が感じ取れる程、複雑である。

落帯：表側の縁では塗料の剥落が多く、右方手前に薄い断面が見える。皮の組織はかなり緻密であるが、判定は困難。

阮咸の名は中国賢人に由来

「資料」には「国家珍宝帳所載の品である。形態は円盤形の胴と長い鹿頸をもつ四絃楽器で、中国の晋代(3~4世紀)に生まれたといわれる。その名は晋の竹林七賢の一人である阮咸の名に因んでつけられたという。槽・鹿頸・海老尾・転手は紫檀で、腹板はヤチダモかシオジである。腹板には他の琵琶類のように響鳴孔はなく、また、柱は十四枚もある。槽その他には螺鈿・琥珀・瑠璃で鸚鵡や唐花文をあらわす。」



復元された阮咸。胴の中央の図柄部分が捍撥(平成14年正倉院展図録)

林謙三によると「長さ100.7、槽の幅42センチ。腹板は沢栗、その他は紫檀製で柱十四枚と転手二箇は新補で、瑠璃・木画・銅線等は後補のところが多い。腹板は三枚接ぎで、その円心より少し上に革の円形捍撥を張り、更にその上方左右に径六・五センチの目をつけてある。捍撥も覆手も南倉のものやや異なる。槽も三枚接ぎの材をくり抜いて作り、下縁に革の落帯を貼る。十四柱のうち頸部に所在する九枚の位置は

頸の表の螺鈿装飾関係から見て現状で適当と認められるが、その他五枚の位置は必ずしも正当とは思われないものがある。頭部の左右に八角の転手^{てんじゅ}を二本ずつさしている。」

螺鈿紫檀阮咸〈らでんしたんのげんかん〉

調査の結果 全体としては保存状態がよさそうであるが、かなり使われていたのか、磨耗、剥落が随所に見られる。

捍撥：直径約15～16cmの円形の皮に彩絵されている。塗料の剥落が所々に見え、全体として黒っぽく、鉱物性塗料が使われていると見られ、亀裂が全面に広がっている。皮の最表面が取れたような肌目の細やかさである。露出部分では皮質のごときものが見られる。全体の厚さは1mm以下で、皮と見られる部分は0.5mm以下と推定される。資料には「捍撥は円形の皮に彩絵」と記載されているが、捍撥では生地^{せぢ}の露出がほとんど見られず、皮種を判定するのは困難である。また、阮咸の形状から皮質露出部分の撮影ができなかった。

落帯：胴の底辺にある落帯の彩色の剥落部には露出した茶色の層が見られ、この部分を観察した。三層の塗装が見え、皮らしいものも見える。その厚みは捍撥よりも薄く、皮種を判定するのは困難である。

箜篌に多くの起源説

前出の『正倉院宝物の故郷』によると「この楽器は明治時代に調査されたところ、すでに大破しており、したがってそれだけではもとの姿に復元することは困難であったが、中国の古い文献の中にも、また西域の遺跡の中からも類似のものが発見されていることから、それらを元にして明治二十七年(1894, 5)ごろに復元模造がなされた。」その形態によって中国起源説、インド起源

説及びイラン起源説がある。正倉院の箜篌は「イラン起源の箜篌といわれているもの」だが、「早くに中国に伝わり、中国で形態的にも整理され、発展したものである。その整理されたものが我が国に伝わったものであって、インドやガンダーラ^{ガンダーラ}辺りから直接伝わったものではない。」



復元された箜篌（平成16年正倉院図録）

そして、「資料」には「箜篌には豎箜篌、臥箜篌、鳳首箜篌の三種がある。正倉院に伝わる二張の箜篌はいずれも豎箜篌。豎箜篌はアッシリア起源で、豎型ハーブの一種。」と述べられている。

漆槽箜篌〈うるしそうのくご〉

調査の結果 調査の対象は、残存部品の槽等に貼られた装飾である。

「皮らしきもの」が使用されていると言われている槽の箇所を観察すると、皮、もしくは、紙らしきものが見られる。拡大すると、太い半透明の絡んだ線維が見られる。その間に微細な小石を詰め込んだ状態が見える。幾つかの部分で皮質様物の痕跡が認められるものの、紙か皮かの材質の判定は困難である。木地の上に地の粉（かなり粗く見える）、麻布、皮か紙、塗料（漆）を重ねたような層が見えるようである。